

ブハラティ・ムカジーの『タイガーの娘』における ブラーミン女性と教育

三 杉 圭 子

インド系アメリカ作家ブハラティ・ムカジーによる『タイガーの娘』(1972)は、著者の長編小説第一作である。タラ・バナジー・カートライトはムカジーが語り続ける移民の物語の主人公のひとりであり、後のヒロインたち、たとえば『妻』(1975)のディンプル、その名が表題になっている『ジャスミン』(1989)、『望ましき娘たち』(2002)のパドマ、パーバティ、タラたちに先んじて、インド、特にカルカッタのベンガル族のブラーミン¹⁾の文化とアメリカ文化とのはざまに位置する。

タラにおけるベンガル族の伝統は家庭において継承される。と同時に、両親は彼女をベルギーの尼僧たちが運営する修道院学校、聖ブレーズに送り、3才の頃から「西洋式」教養を身につけさせる。そしてタラは15才にしてアメリカへ留学、ヴァッサー大学を出、ウイスコンシン大学大学院で博士課程にはいるが、1967年に出会ったアメリカ人作家デイヴィッド・カートライトと結婚し、ニューヨークのコロンビア大学の近隣に住んでいる。22才のタラはニューヨークでの新しい暮らしに馴染めず、7年ぶりに懐かしい故郷のカルカッタを訪れる。しかし歳月は故郷の街を変え、アメリカでの暮らしは彼女を変え、タラはカルカッタで自身の立場を見失うこととなる。

タラの多義性は貧困層が大多数をしめる20世紀半ばのカルカッタでベンガル・ブラーミンとして「西洋式」教育を受け始めたときから既に始まっているといえる。アメリカへの留学はその延長線上にある。しかし、大学院への進学、アメリカ人との結婚はブラーミン女性のたどるべき道からの逸脱を意味する。

植民地時代からポスト植民地時代をとおして、ブラーミン女性に期待されている教育とは、表層的な「西洋式」マナーを珍重するものであり、真の「西洋化」を目指すものではない。ブラーミンの伝統は家庭のまもり手としての女性のジェンダー・ロールを重視する点では、19世紀イギリス、ヴィクトリア朝時代の女性観と酷似している。しかし、それは「ヒンドゥー的なあふれんばかりの想像力」によって換骨奪胎されている(34)。現場の教育者たちの理念はどうか、カルカッタのベンガル・ブラーミンが聖ブレイズに求めたのは、ベンガル族のゆかしき伝統の後継者を育成することである。

アメリカでの教育を積み重ねることで、タラは、自身を堅固にするどころか、判断力を行使できない状態に陥ってしまう。なぜならば、ベンガル・ブラーミン女性には、身分相応の同族の夫を得、彼の経済的社会的発展を享受するとともに、それに貢献することこそが、最善の幸福であり、使命とされており、その伝統的価値観を相殺するほどには、タラのアメリカへの同化は十分ではないからである。タラはベンガル族でも、ブラーミンでもないアメリカ人の夫を、そして彼とのアメリカでの結婚生活を選んだにもかかわらず、単身カルカッタを訪れるにあたり、不在の夫への依存を露呈することになる。

本論ではベンガル・ブラーミン社会における女子教育が、アメリカに渡った主人公の自己矛盾をきたす要因となっていることを、語りの構造、タラの受動性、そして彼女が故郷インド、カルカッタに向けるまなざしの揺らぎをとおして考察したい。

物語は三人称を用いる語り手によって主人公のタラによりそって語られる。ここで注目したいのは、著者ムカジーと語り手、そして主人公タラとの距離である。ムカジー自身がベンガル・ブラーミンであり、カルカッタで「西洋式」の教育を受けた後、1961年にアイオワ大学に留学し、アメリカ生まれのカナダ人作家クレア・ブレイズと結婚していることはよく知られている。いくつかの北米の大学で教鞭を執り、1980年以来アメリカに居を定めている。タラはその

後のどのヒロインたちよりも、ムカジーの自伝的要素が濃い主人公だといえる。

『タイガーの娘』は1969年から71年にかけてカナダで執筆されている。その後ムカジーはサバティカルを利用して1973年から74年にかけて家族とともに故郷を訪れている。ブレイズとの共著『カルカッタの昼と夜』(1977)はその記録である²⁾。当時のカナダにおける人種偏見との軋轢や私生活上の事故が重なったムカジーが、少なからず故郷に心の平穩を求めていたこともあわせて、移民女性の北米からの一時帰国という設定は、タラの境地と合致するところがある。しかし、ムカジー自身のインドへの視点はタラのそれに比べれば、より奥深く、明晰である。

ムカジーは意図的に不安定な若いアメリカへの移民女性を視点にすえることで、主人公自身の混乱と変わりゆく故郷の混乱とを重ね合わせて描こうとしたのではないだろうか³⁾。語り手がタラの心情を代弁しながらも、主人公への皮肉とも批判ともとれる客観的記述を交えていることを指摘しておかねばならない⁴⁾。

タラの心象によりそったこの作品は、オープンエンドとなって、文化の衝突を図式化することはまぬがれているが、後のノンフィクション作品『カルカッタの昼と夜』において、ムカジーが自分の言葉で、改めてインドの印象を語る雄弁さに勝ることはない。しかしムカジーはあえて、明晰さよりは精神的に未熟で不安定な主人公をとおしてこそ描きうる、彼女をとりまくできごとの揺らぎを表現しようとしたのだと思われる。タラは未だ大学院生であり、アメリカでの高等教育課程の途中にあり、キャサリン・マンズフィールドについての博士論文を書こうとしている。それは彼女がアメリカへの同化、ひいては人間形成の過程においても未完であることの象徴といえよう。

カルカッタにおけるブラーミン女性の教育は、聖ブレイズを中心としている⁵⁾。タラと同じブラーミンの友人たち、リーナやニリマはベルギーの尼僧た

ちからヨーロッパ式教養を学ぶことで、カルカッタの日常から一線を画した生活様式を確立する術を身につける。アメリカから一時帰国したタラとその友人たちは再会し、日毎カテリ・コンティネンタル・ホテルに集まり、退屈をしのいでいる。このホテルはヨーロッパの植民者で賑わっていたが、今は地元カルカッタの富裕層を顧客としている。女性の友人たちは未だ結婚をせず、特にこれといった仕事を持つ必要もなく、同じブラーミンの男性の友人たち、マッチ工場経営者の跡継ぎプロノブ、『カルカッタ・オブザーヴァー』紙のジャーナリスト、サンジェイらとともに暇と財力をもてあましている。

しかし、1960年代後半から70年代にかけてのカルカッタは、労働者運動が革新的な動きを見せ、激しい反体制ストライキ、暴動が頻発していた。社会の近代化の波の中で、ブラーミンたちは、産業の近代化こそ歓迎すれども、自らの特権階級としての生活様式を変えることには大きな抵抗を示し、労働者層の攻撃的となっていた。ジャーナリストのサンジェイはその動きを報道しつつ、政治的には新右翼 P. K. タンタンワラに傾倒し、労働者運動の粉碎を願っている。経営者プロノブもストライキの脅威に頭を悩ませ、改革と取り組むむきは見られない。そしてタラたちを含めたこの小さなサークルに、自分たちの既得権を脅かす変化を拒もうとするベンガル・ブラーミンの保守性が凝縮されているといえる。

見たくないものには目を向けないという彼らの資質は、タラの場合、聖ブレーズでの教育によって強化されたといえる。帰郷後まもなくタラは母に連れられてひとりのおばを訪ねる。夫に先立たれ、内反足の娘を抱えたおばは苦しい生活を強いられている。娘の足の治療に良いとされている香を焚き、その煙の中で久々の再会の場面が描かれる。「ギプスや矯正靴は試したの？」とその場の「屈辱」を逃れようとタラはおばに尋ねる (36)。しかしその「屈辱」はおばのものではなく、その場に居合わせなければならないタラ自身のものであり、非科学的な治療しか施せないおば親子の状況を受けいられないタラの不寛容を示している。

タラに対するお婆の弾劾は厳しく、「私たちのような者につきあうには教育がありすぎると思っているんだね」(36)、そして、「大学出の女の子たちはみな同じさ」、「おまえはなぜ私たちのやり方を軽蔑するんだい？ 聖ブレーズのような学校にいくとそうなるのさ」(37) とタラの逃避癖と教育との関連を指摘する。

タラはお婆の糾弾に対して、本当は彼女たちを憎んでなどなく、愛しているのだと考えるが、既に時機を逸したと感じてそれを口にできない(38)。厳密にはタラは冷酷ではなく、むしろ神経過敏な人間である。しかし、その過敏さは、他人への配慮の前に、外的衝撃から自分を護る方向へと彼女を駆り立てるのである。お婆親子の暮らしぶりは彼女の限られた許容範囲を不幸なことに超えていたのである。

タラの周囲に対する認識の曖昧さは稚拙極まりなく、お婆の言葉によって初めて自らが故郷の文化に抱いた「異質さ」(37) について考察を始めるほどである。確かに聖ブレーズでは「通俗」や「低俗」といった言葉に適切な悪意をこめるよう教えられた(37)。あるいはヴァッサーで、ウイスコンシンのマディソンで、この「異質さ」は始まったのかとタラは振りかえる。7年の滞米生活を経て、一度も故郷カルカッタに対する「異質さ」について内省することなく過ごしてきたこと自体が異様である。ニューヨークの治安の悪さに恐れを抱き、身の危険を覚え、カルカッタの路上生活者に初めて気がついたかのようにある。

タラの視野の狭さについてあえて説明を求めるならば、聖ブレーズで過ごした15才まで、彼女は伝説的な「ベンガル・タイガー」の異名をとる父の庇護のもとにあり、高い塀と守衛に護られ、学内ではインドやカルカッタについてではなく、ヨーロッパの文化教養を身につけるべく、同じブラーミンの少女たちと交流していたにすぎないことを考慮せねばならないだろう。そのような特別な環境は、まさにカルカッタの社会状況を彼女の視野から排除するために用意されていたのであり、タラがカースト社会の暗部に目をやることを「屈辱」と

まで感じる資質は既に聖ブレース時代に培われていたといえる。

さらにいえば、聖ブレースでの教育は両親の方針であり、タラはそれに従ったばかりであり、その後も独自の理性的判断によって道を切り開いてきたとは言い難い。最初にアメリカに渡ったことも、タラ自身の決断ではなく、父「ベンガル・タイガー」の判断であった(25)。自分の娘ならば立派にブラーミンにふさわしい教養をアメリカの名門女子大で身につけて帰ってくることを期待したのであろう。しかしタラは父のような勇敢な娘ではなく、ホームシックに悩まされながらようやく1年目を終えた。そしてヴァッサーの空っぽの寮で孤独な夏を迎え、アカデミック・アドバイザーにウイスコンシン大学のサマー・スクールに行くことを薦められ、後にマディソンでデイヴィッドと出会うことになる。

ニューヨークに来るまで、タラはアメリカの大学町にしか滞在したことがなく、学生生活以外にアメリカを体験してはいない。これもある意味で彼女の未熟さを助長する要因であったかもしれない。語り手は、「後にタラは自分はヴァッサーの寮で、自分で考えることを始めたと言うのを好んだ。それはあまり正確ではないかもしれない」と言い放つ(11)。タラがしたことといえば、聖ブレースでは許されなかった性について深夜まで他の寮生と語り合い、インドにおける人口増加問題とあわせて、避妊知識を増やしたことくらいである。教育機関は必ずしも人格形成のためにあるのではないし、そこで内省をともなった成長を遂げられるかどうかは本人の資質しだいであろう。タラはその意味では成長することがなかった。

デイヴィッドとの恋愛と結婚も、タラが勝ち取った両親からの自立としては描かれていない。それは、タラの生涯最初の選択であったかもしれない。しかし、エレベーターで出会って降りる前には恋に落ちていたと振りかえるほど、衝動的な要素が強い(37)。そしてマディソンからニューヨークに移り住んだのは、タラの意志ではなく、作家の夫の要望に応じたものと思われる。そして彼女は最愛の夫を得ながらも、ニューヨークの暴力や危険と隣り合わせの「エ

キゾティック」(33)な生活に絶望し、改めて強い望郷の念にかられる。

タラはいずれにせよ、娘か妻としてのアイデンティティしか持ち得ない。ニューヨークにおいてはカルカッタの「タイガーの娘」であることを、そして執筆中の夫を置いてひとり向かったカルカッタでは、アメリカ人デイヴィッド・カートライトの妻であることを心の拠り所にしようとして、どちらにも安住できずにいる⁶⁾。さらに、タラはデイヴィッドがいつも彼女に本を買い与え、「教育しようとしていた」ことに思い当たり、もし自分が彼の理想に近づけないのであればもう愛されないのではないかと案じる(50)。タラは教育されることを常に受動的に待ち続けているのであり、ピグマリオンが愛した象牙の像以外のなにものでもない。それはアメリカ人との結婚というアクシデントを経て、聖ブレーズでの日々が彼女にもたらした当然の帰結ともいえる。

タラの滞在は、新しいカルカッタが古い時代を暴力とともにねじ伏せてゆく時期にあたり、物語が暴動による流血事件へと向かうとともにタラの心は揺れ動いてゆく。社会の変化に目をつぶろうとする聖ブレーズ時代からの友人たちとタラとの間には軋轢が生じる。一方で、タラの無垢に惹かれる高齢のジョイントン・ロイ・チャウダリーとの関わりは、彼女に新しい視点を与えるかのように見える。

タラ自身の誇り高きベンガル・ブラーミン気質は、前述のように、7年のアメリカ生活を経てなお、彼女の中に根強く存在している。ボンベイの空港で、またカルカッタへの移動の電車の中で、彼女は喧噪や俗物や異民族に対する嫌悪や優越感を隠せない。同時に、カートライトを名乗り、ヨーロッパ系の夫がいることを誇りに思うタラは、それが自分を純粋なブラーミンのサークルから除外することになかなか気づかない。特に聖ブレーズでともに「西洋式」の教育を受けた友人たちとの感覚のずれは大きい。彼女たちは、徐々に本心をタラに明かすようになり、デイヴィッドとの結婚はブラーミン女性にとって恥知らずな行為だと非難し、7年のアメリカ生活はタラの繊細で鋭敏な感性を腐食し

てしまったと言い、自分で皿洗いをし、ゴミを捨てるような家事労働に従事するのは、タラにはふさわしい罰だとさえ感じている (55)。デイヴィッドに関しては、彼が名目上はせめてキリスト教徒でイスラム教徒ではないことだけが不幸中の幸いだと言わんばかりである (56)。聖ブレイズの尼僧たちはデイヴィッドの写真や手紙を見ていたく感銘を受けるが、タラの友人たち、ベンガル・ブラーミンの女性たちには、デイヴィッドは自分たちのカースト制とは無関係な異邦人、あるいはその存在さえ認める価値のない者として除外される。

カテリ・コンティネンタル・ホテルに集うグループにしても、タラのアメリカにおける実生活に興味を抱く者はいない。彼らは「アメリカの話を知った。テレビや車や冷凍食品やレコードプレーヤーについての話だ。しかしタラがゲッターや学生運動について語ろうとすると、友人たちはみな不満を言った。ひどいナンセンスだ！アメリカは素晴らしく、ニューヨークはカルカッタとは大違いだなんてことは、みんな知っている」というのだ (56)。誰も自分たちの想像を超える事実になど耳を傾けようとはしない。アメリカの消費文化は彼らの好奇心を十二分にそそるのだが、タラの日常や見聞など何の意味もないのである。

友人たちとの再会にあたり、当初、7年の歳月はタラにとって彼らとの隔たりを大きく感じさせた。タラが最初に抱いた直感は「この人たちからは離れていくべきだ」というものだった (43)。そこには距離感がかもし出す、ある種の客観性が存在し、渦中に巻き込まれる以前の冷静な観察がある。タラはカルカッタのベンガル・ブラーミンたちをチェーホフの登場人物たちに例え、モスクワに憧れながら自らの地所に留まっているのだと感じる (45)。彼らのモスクワはこの文脈においてはボンベイであるが、潜在的にはアメリカかもしれない。タラの直感は彼女自身がおそらく意図しなかったベンガル・ブラーミンたちの宿命を示唆している。すなわち、ロシア革命が迫っているにもかかわらず、それまでの生活を捨てることなく、大きな歴史の変動には目を向けようとせず、自らの日常に埋没しようとする貴族階級の姿である⁷⁾。たしかにベンガ

ル・ブラーミンは、ロシア貴族のように完全に滅びさりはしないことを歴史は語っているが、彼らの自己求心的な逃避は、チェーホフが描いたそれに等しい。タラは、かつて父が、ストライキを始めた労働者たちを威厳ある態度と雄弁をもって鎮めた記憶へとゆきあたる。しかし、今のカルカッタは危険な街となり、そのような余地はないことを悟るのである。

タラは友人たちの語調、周囲への配慮の意図的欠落、貴族的同一性を恐れるのだが、この皮肉な直感に従うことはない(43)。彼女はアメリカが与えた表面上の変化に友人たちがぶしつけな視線と批判を浴びせながらも、夫デイヴィッドについては決して話題にしないことに気づいている。しかし、そんな友人たちの振る舞いは、自分がアメリカでの生活において「そぎ落としたもの」(43)だという感覚をタラはまもなく失い、このグループの閉鎖性に回帰してゆく。語り手は、前述の父の思い出以外には、「タラは組合や労働運動や、ピケットについてはよく知らなかった」と言い、彼女には正確に社会の変動を見抜く洞察力はないことを指摘している(46)。

タラの無知と無垢は、しかしながら、アッサムの紅茶農園主、ジョイントン・ロイ・チャウダリーには、護るべき輝かしきものとして映る。彼自身は変わりゆく社会に疲弊し、カテリ・コンティネンタル・ホテルで、未だ誇り高いブラーミンの若者たちに感嘆しつつ、特にタラのまばゆいばかりの美しさに心惹かれる。チャウダリーはタラの強い感受性に訴えかけ、カルカッタの現実を彼女に理解させようと手ほどきを試みる。それは一種の教育ともいえる。彼はタラが未完であることを察知していたかのようなのである。それゆえ、カルカッタの暗部を見学させ、そこから現実を学びとったうえで、なお輝きを増すべき気高さをタラに求めたのだと考えられる。チャウダリーの介入によって、タラは友人たちとの閉塞性から抜けだし、少なからず見聞を得る。それがどの程度定着したかについては、彼にはタラの知性を過大評価するむきはあったかもしれない。けれど、その場その場でタラがチャウダリーのレッスンに、情緒的な反

応を示し、嫌悪、動揺を含めて心動かされることは事実である。この一貫性を欠く揺らぎが彼女の本質であり、語り手はそれを利用して、タラの混乱とカルカッタの混乱を並行して描いてゆく。

チャウダリーのレッスンは、川沿いの葬儀場への誘いに始まる。火葬場は厳かな詠唱を除けば静寂に包まれ、葬儀用の薪が土手に積まれている。遺体を包む炎を遠くに、二人は川岸を歩き始める。チャウダリーは多くを語らないが、タラにヒンドゥーの伝統が息づくカルカッタを見せたかったに違いない。思わぬ侵入者とチャウダリーの体調の異変に取り乱したタラは、彼を運転手に任せて逃げ帰ってしまうが、彼女はこの風変わりな人物に奇妙な愛着を抱くようになる。それはタラが今までに見たことがない街への好奇心の芽生えでもある。

二度目のレッスンで、チャウダリーはタラを、彼の所有地の難民や、家賃を払えない不法居住者たちに引き合わせる。タラは既に往路で、予想外の醜悪な風景と身に迫る危険に後悔を始めるが、チャウダリーの案内で、彼の敷地内にあばら屋を立てた人々の生活を垣間見ることになる。タラは貧しく非衛生的な暮らしぶりに目を覆わんばかりであるが、いたいけない子どもたちには憐憫の情を覚え、彼らをみな養子にしたいとさえ思う。しかし、明らかに病に冒された女の子が彼女に近寄り、水をかけたとたん、タラはパニックに陥り、再び家に逃げ帰る。タラの感傷は生理的嫌悪感に勝ることがなく、彼女は心中の混乱に身を委ねるほか術を知らない。その後彼女は、新しいカルカッタで保守勢力を伸ばしてゆく俗物、タンタンワリ的手中に陥り、陵辱される。チャウダリーの期待に反し、変動する社会の中で倫理的拠り所を見失った彼女は、自らの不安定さゆえに、揺れ動く境遇の犠牲者になったのだともいえる。

物語終結部で、チャウダリーが、タラを案じてカテリ・コンティネンタル・ホテルから、暴徒の渦巻く通りにさまよい出、デモ行進を続ける人々に暴行を受ける時も、タラは事の次第に流されるまま、何ら能動的な行動を起こすことができない。チャウダリーは警官の助けによって九死に一生を得るが、彼を救おうとタラを振り切るとびだしたプロノブは、爆発物によって命を落とす。

物語はカルカッタ脱出を願い、デイヴィッドへの愛を胸の奥で訴えるタラの描写で幕を閉じるのだが、それは終始変わらないタラの逃避癖を露呈している。社会の変動に気持ちを揺さぶられ、関心を寄せながらも、正面から向き合うことができず、その場を去ることだけを願うタラは、ニューヨークの喧噪を逃れてカルカッタに戻ってきてから、一体何を学んだといえようか。

あらゆる教育と学びの場に身をおきながら、アメリカに移民したベンガル・ブラーミンの娘、タラは、その多義性を昇華させることができない。語り手はこの流血場面においてもタラとは距離を置き、彼女における意志の欠落を淡々と描き、冷笑するようにさえ聞こえる。

この吹きすさぶ嵐の中で、タラと同年代ながらも唯一不動の位置をまもり続けるのが彼女の友人リーナである。リーナは聖ブレイズ時代に他の少女たちと同じくアメリカのポップシンガー、ジョニー・マティスをアイドルとしてあがめ、久々に帰国したタラのアメリカ製の服や持ち物に大きな関心を寄せ、最新のアメリカン・スラングを覚えたがる浅薄な通俗性を持っている。しかし、リーナはベンガル・ブラーミンの女性としての規範を踏み越えることは決してしない。一見軽率とみえる彼女だが、あらゆる外的衝撃に付和雷同するタラとは対照的に、リーナは揺るぎない価値基準を持っており、それはまさしくベンガル・ブラーミンの女性にふさわしいものとして描かれている。

タラに対するリーナの批判の中で最も核心的なものは、タラはあまりにも「自己中心的」だという指摘である(105)。アメリカでの歳月がタラをそうさせたのではないかという疑念をタラ自身、感じており、それはどうやらの外れではない。彼女たちによれば、「自己中心的」であるということは、ものごとの判断基準を自分個人に頼り、私的な感傷や衝動を社会規範に持ち込もうとする誤謬である。それに対して、リーナがかかげる基準は、個人ではなく、社会階級である。ベンガル・ブラーミンであること、その社会的地位が、絶対的基準として存在するのであり、その中にはジェンダー・ロールを含めて、揺るぎ

ない行動規範が定められている。それゆえ、ベンガル・ブラーミンの女性として、どの場面では何が許容され、何がされないのか、リーナには躊躇の余地がない。

たとえば、リーナは、アメリカからやってきたブラック・パンサー党員とおぼしきアフリカ系の青年から、独特の言葉遣いや言い回しを、タラや周囲がはらはらする中、ファッションナブルなものとして、またたくまに吸収する。しかし、「ライト・オン!」と連呼するリーナは、青年の反体制的思想に影響を受けることはない。彼女が次にそう叫ぶのは、デモ行進を監視する警官へ、声援を送る時である。体制権力を象徴する警官の実力行使を支持する際に、対抗文化を担うアフリカ系アメリカ人青年から覚えた言い回しを使うことの皮肉は、リーナには無関係である。アメリカ文化は彼女には表層的なものでしかない。その文脈を考えること、異文化を理解しようとすることは、彼女にとっては「自己中心的」なことになるのだ。

同様に、タラがカルカッタの道端で、ヨーグルトを食すことどもたちを目の当たりにして、暗い気分になる時、リーナはそれを「自己中心的」だと非難する(106)。それがカルカッタの現実であり、聖ブレーズ出身の友人たちは、「あのこどもたちは丈夫だし、あの暮らしに慣れているのだし、『私たちのような人間』とは違う」のだからと意に介しない(84)⁸⁾。それぞれの階級にはそれなりの暮らしがあるのだと割り切ってしまうと、私的な感情をからませる必要はないのである。不法居住者たちに接した時も、我を失ったタラを介抱したリーナは、彼らに立ち退きを命ずるよう、聴き取った名前のリストをチャウダリーに手渡すだけの冷静さを保ち続けている。

一方、タラにとっては、自分のような「上品な娘たち」が歩くその同じ通りの端で、貧しいこどもが食事をしているカルカッタの街そのものが、我慢ならぬのである(84)。彼女にしてみれば、それは惨めな状況である。タラは友人の言葉よりも、こどもたちが食べ物をむさぼりながら顔にたたえていた喜びに、より心を痛めたという(84)。なぜならば、それは彼女にとっては見るに

耐えないものであるからだ。どうしてそのような暮らしを平然と送れるのか、しかもそこに喜びを見出すことができるのか。しかし、タラの中に子どもたちに対する深い共感がはたしてあるかを問うならば、チャウダリーのレッスンから再度逃げ帰ったことを思い起こせば答えは否である。一抹の哀れみを覚えることはあっても、根本的には、タラは貧しい人々に手を差し伸べることさえしない。良心の呵責というものでもない。なぜ、自分の前にそのような惨めな姿をさらすのだという怒りに近いものだと言ってもよい。「インドを離れていた年月が彼女を自己中心的にしていた。彼女はすべてを、暑さを、物乞いたちを、個人的な侮辱や挑戦として受けとめていた」(86)。階級社会の抜本的改革を望んでいるわけではないのに、私的な感傷をもって下層階級の人々をみることに、さらには、自分に親切に接してくれないカルカッタの街に苛立ちを感じていること、それがタラの「自己中心的」な発想の正体である。タラは、冷静さを失わない友人たちを模倣しなければここにはいられないと痛感する。こうしてタラのカルカッタ滞在は、アメリカでの暮らしで薄れていた階級社会の再認識と、ある意味でアメリカ的な個人主義に基づいた私的な感情とのはざまを揺れ動くものとなる。

『タイガーの娘』は、主人公の成長を描く教養小説とは異なり、タラは揺らぎ続ける人物である。彼女はあらゆる教育を受け続ける人物でもある。最初は聖ブレース、次にヴァッサー、そしてウイスコンシンにおいて。あるいは父ベンガル・タイガー、夫デイヴィッド・カートライト、また、ジョイントン・ロイ・チャウダリー、そしてリーナたち聖ブレースの友人たちによって。ベンガル・ブラーミンの女性として生まれた彼女は、その階級のしきたりに従って聖ブレースでブラーミンにふさわしい教養を身につけ、伝統的価値観を継承するはずだった。しかし彼女は、理性よりは感受性に、知識よりは情緒に支配される傾向が強く、7年にわたるアメリカにおける高等教育と、アメリカ人との結婚を経てなお、自分の中で、ベンガル・ブラーミンの伝統文化がどの程度根付

いているのか、見定めることができない未完の人である。アメリカに同化しきれず、既にベンガル・ブラーミン社会には戻れないタラは、矛盾を抱え、揺れ動き続けている。ベンガル・ブラーミン社会における女子教育は、アメリカに渡ったタラにとって、成長の基盤とはならず、むしろ制約を与えるものとなり、彼女の感受性に相反して、変容するカルカッタ社会から学ぶことを阻む、くびきとなっているといえよう。

注

- 1) インドのカースト制における最高階級ブラーフマンあるいはバラモン。Mukherjee は一貫して Brahmin の表記を用いているため本論ではこれにならう。Bharati Mukherjee, *The Tiger's Daughter* (1971; Markham, Ontario, Penguin, 1987).
- 2) Clark Blaise and Bharati Mukherjee, *Days and Nights in Calcutta* (1977; St. Paul: Hungry Mind, 1995).
- 3) John Spurling は Mukherjee の巧妙な主人公の用い方こそがこの作品の強みであり独自性であるとし、読者は「崩れ落ちてゆくのは主人公というよりは彼女をとりまく世界であることに気づかされる」と指摘している (“Losing Caste,” *New Statesman*, 6 July 1973: 26)。
- 4) *The Times Literary Supplement* 誌は、*The Tiger's Daughter* を総じて厳しく批評しているが、Mukherjee が「皮肉とカラフルなノスタルジアの間に熟練したバランスをとることで、感情を抑制している」点は評価している (“Oh, Calcutta!” *The Times Literary Supplement*, 29 June 1973: 736)。
- 5) Mukherjee によれば実際にはアイルランドの尼僧たちによる Loreto House がその役割を果たしている (*Days and Nights in Calcutta* 199, *passim*)。
- 6) F. A. Inamdar は、「タラのアメリカ社会への適応の努力が、インド式の生活に対する拒否と嫌悪感をもたらし、彼女を不安定にする」と分析しているが、この因果関係における「タラのアメリカ社会への適応の努力」については十分な例証が欠けていると思われる (“Immigrant Lives: Protagonists in *The Tiger's Daughter* and *Wife*,” in R. K. Dhawan, ed., *The Fiction of Bharati Mukherjee: A Critical Symposium* [New Delhi: Prestige, 1996] 40)。
- 7) Martin Levin は、ブラーミン社会を「『桜の園』シンドローム」をほうふつとさせると評している (a review of *The Tiger's Daughter*, *The New York Times Book Review*,

2 Jan. 1972: 16)。

- 8) Peter S. Prescott は、「ブラーミンたちはいつも周囲の惨状、彼らの家の門で眠っているか死んでいるかして倒れているこどもたちから自らを切り離してきた」と指摘している (“Lives of a Bengal Lady,” *Newsweek*, 17 Jan. 1972: 80)。

文 献

- Blaise, Claire and Bharati Mukherjee. *Days and Nights in Calcutta*. 1977; St. Paul: Hungry Mind, 1995.
- Dhawan, R. K., ed. *The Fiction of Bharati Mukherjee: A Critical Symposium*. New Delhi: Prestige, 1996.
- Levin, Martin. A review of *The Tiger's Daughter*, *The New York Times Book Review*, 2 Jan. 1972: 16.
- Mukherjee, Bharati. *The Desirable Daughters*. New York: Hyperion, 2002.
- . *Jasmine*. 1979; New York: Ballantine, 1991.
- . *The Tiger's Daughter*. 1971; Markham, Ontario: Penguin, 1987.
- . *Wife*. 1975; New York: Ballantine, 1992.
- Prescott, Peter S. “Lives of a Bengal Lady,” *Newsweek*, 17 Jan. 1972: 79–80.
- Spurling, John. “Losing Caste,” *New Statesman*, 6 July 1973, 26.
- The Times Literary Supplement*. “Oh, Calcutta!” *The Times Literary Supplement*, 29 June 1973: 736.

Summary

Brahmin Women and Education in Bharati Mukherjee's *The Tiger's Daughter*

Keiko Misugi

The Tiger's Daughter (1972) is a first novel by Bharati Mukherjee, Bengali Indian American writer, who has since accomplished herself as a delegate of immigrants in the United States. The protagonist Tara Banerjee Cartwright, like Mukherjee, is a Bengali Brahmin who has emigrated to the States. Through her homebound journey and stay in Calcutta after seven years' absence, Tara's ambiguity as an emigrated Brahmin woman is represented as problematic.

A sensitive, intelligent, yet passive and immature person as she is, Tara goes through her inner unrest between the two cultures, while Calcutta society encounters upheaval in which the tradition seems to be threatened by the modern democratic movement. This paper analyzes how Tara's education as a Bengali Brahmin woman has resulted in her self-contradictory discrepancy as a Bengali Indian American immigrant, by examining the narrative structure of the novel, the characterization of the protagonist as a delicate woman with aborted potential for independent intelligence, and her mental commotion along with the social one in Calcutta. Tara remains an incomplete figure even at the end of the novel, which discloses the fact that Bengali Brahmin education in Calcutta functions as an imperative in the troubled young American immigrant.

Tara's education has begun in Calcutta Brahmin society where it is encouraged that women should receive "Westernized" education to protect their status, however, not be truly "Westernized." It is important that their exclusive Bengali Brahmin value is passed on through education at home and in school

so that they may maintain their superior posture in Calcutta society along with the specific gender roles to bolster the traditional patriarchal order.

Tara falls in the dilemma between the Bengali Brahmin and American culture. She has been educated in Calcutta to follow the tradition of her caste, and sent by his father, legendary Bengali Tiger, to Vasser at the age of fifteen. She then marries an American writer, David Cartwright, becomes a Ph.D. candidate, and lives in New York—the act that theoretically outcastes her from Brahmin society. She, however, has not fully assimilated to American culture either. Thus, on her return to Calcutta alone, without David's moral support, Tara sways back and forth between Bengali Brahmin and American value, as well as between the tradition and the modernization in Calcutta.